

## 民進党が台北市長候補を擁立へ、 台湾独立派大老・辜寬敏氏の声

今年台湾で4年に一度の統一地方選挙があり、11月24日に投開票が行われる。台北、新北、桃園、台中、台南、高雄といった直轄市の市長選挙をはじめ、台湾全22県市の市議会議員などが決められる選挙であり、2020年の総統選挙を前にした重要な「前哨戦」である。なかでも台北市長選挙の行方は今、最も注目を集めている。

現在の台北市長は柯文哲氏。柯氏は主要政党には属さず、緑（民主進歩党）でも青（中国国民党）でもない「白色」市長である。前回の2014年選挙は、柯氏と国民党候補であった連勝文氏との一騎打ちで、民進党は独自候補を出さず、柯氏の支援に回った。そして柯氏は、得票数85万3,983票、得票率57.16%で、連氏に24万票以上の差をつけて圧勝した。

しかし、今回の台北市長選挙の構図は前回と異なる。それは民進党が柯氏の支援には回らず、独自候補の擁立を決定したからだ。民進党は5月30日、中央執行委員会を開き、現職の民進党立法委員である姚文智氏を台北市長候補に決定した。この決定を受けて蔡英文主席は「全党員が一致団結し、共同で

努力し、市民に対して最大の支持を勝ち取らなければならない」とメッセージを発した。

蔡氏が党の「団結」を呼び掛けたのは、柯氏と対決する道を選ぶか、もしくは2020年の総統選挙を見据えて協力する道を選ぶかで党内に意見の違いがあったからではないかと想像できる。特に独立派の間には独自候補の擁立をなかなか決断できない執行部に対し、不満が鬱積していた。

なかでも今回の独自候補擁立の過程において、メディアでその発言が注目されていた人物がいる。総統府資政（上級顧問）で台湾政治のご意見番、辜寬敏氏だ。現在92歳の辜氏は、かつて日本において台湾独立運動を展開した「台湾青年会」の委員長を務めた経験もある台湾独立派の「大老」でもある。

辜氏は「兩岸は一つの家族」と発言する柯氏には台湾の価値や歴史、未来への十分な認識が欠けていると批判を繰り返し、民進党は独自候補を擁立すべきだと一貫して主張してきた。4月24日に「自由時報」のインタビューに応じた際には「台湾を売るようなことができるのは柯文哲だけだ！」と痛烈に批

判し、もし柯氏を選ぶのであれば台北市民は将来を覚悟しなければならないと訴えた。また当選如何にかかわらず、政党として独自候補を擁立することは民進党の台北市民に対する義務とサービスであるとし、「今回も柯氏に譲るのであれば、私は真正面から蔡英文を批判する」と断言した。同時に、「今回、柯氏に譲れば、まさか2020年の総統選挙では譲ってくれると思っているのか？ そんなのは少しの政治的気概もない！ まさに foolish、愚かだ」とも述べている。

私は2018年3月19日、千葉科学大学薬学部の小枝義人教授と拓殖大学海外事情研究所の丹羽文生准教授による辜氏へのインタビューに同行し、辜氏の事務所でお話をうかがう機会に恵まれた。その日の辜氏もトレードマークである白のジャケットを着用し、白髪と白髭を蓄えていた。

日華断交直前に辜氏が大平正芳外相から依頼され密使として果たした役割など貴重な歴史的証言をうかがえたのは幸運であった。1時間以上のインタビューでは、現在の蔡英文政権への評価にも及んだ。

辜氏は蔡英文総統の指南役ではあるが、その評価は辛口で、「4年で辞めるべきだ」とも言っている。そして、今の蔡英文氏は「日本語で言うと大変な自信家」だと評していた。こう断言するのも、辜氏が人生を賭して闘ってきた台湾独立運動を通じ、「権力者は間違いを犯す」ことを身に沁みて知っているからだろう。

辜氏は別れ際に「残った人生すべて

を、台湾を正常な“国”にすることに尽くす」と語った。権力者と闘い、台湾独立に生涯を捧げる辜寬敏氏。その声に権力を担う者は謙虚に耳を傾けることができるだろうか。まずは11月の統一地方選挙の行方に注目である。



2018年3月19日、事務所でインタビューに応じる辜寬敏氏